「あいさつ」の発生

● 髙　橋　六　二

はじめに

コミュニケーション文化をどのようにとらえるか。いま、コミュニケーションを、人が他者との関係において自分をどのように伝えるか、にあるとしてみる。それは自分の「こころ」を、「ことば」あるいは「からだ」もしくは「もの」によって表すことだといってもよいだろう。そのとき、基本にあるのは「あいさつ」というものではないか。

「あいさつ」は、今日、人の生活においてきわめて日常化してきている。そのために「あいさつ」に特別な思いを込めるということも、ごく希薄になっている、あるいはほとんど無意識的・形式的になっている、という場合が多くなっているのではあるまいか。たとえば冠婚葬祭にともなうそれを思い返してみれば、ここ30年、50年前との変容の差だけを見ても実に大きい。「あいさつ」は人の営みとともに変わってやまないものなのだろう。

変わり続ける「あいさつ」は、では、どのように発生したのか。これを考えることはおのずからに「あいさつ」を「文化」としてみることになる。その手始めとして、ここでは「あいさつ」ということばの問題からはいることにする。

1、辞典にみる「挨拶」の事例から

「あいさつ」は一般的に「挨拶」という漢字を当てて扱われる場合が多い。まずは手っ取り早いところで辞典によってそれを見てみよう。

あい-さつ【挨拶】［名］（「挨」も「拶」も押すことで、複数で「押し合う」意から）

①禅宗で、問答によって、門下の僧の悟りの深浅をためすこと。→一挨一拶。

②手紙の往復、応答のことば。

③交際を維持するための社交的儀礼。

㋑人と会った時、別れる時などに取り交わす儀礼、応対のことばや動作。

㋺応答。受け答え。

㋩社交的な応対。ふるまい。

㋥儀式、就任、解任などの時、祝意、謝意、親愛の意などを述べること。また、そのことば。

㋭発句または連句において、主人または客が、相手に対する儀礼、親愛の気持をこめて句を詠むこと。

㋬花柳界で芸妓などが、ちょっと客席に顔を出し、すぐ他の席へ行くこと。

㋣皮肉や悪意をこめた応答。→ごあいさつ（御挨拶）②。

④人と人との関係が、親密になるようにはたらきかけること。

㋑とりもち。仲介。紹介。世話。

㋺仲裁。調停。とりなし。

㋩「あいさつにん（挨拶人）」の略。

⑤人と人との間柄。両者の仲。交際。付き合い。

⑥仕返しをいう不良仲間の隠語。

語誌　中国語の原義は、葛長庚の「鶴林問道篇」の「昔者、天子登封二泰山一、其時、士庶挨拶、独召二一県尉一行レ轎而前呼曰、官人来、衆皆靡然」のように、前に在るものを推し除けて進み出る意であるが、禅家において、「碧巖録-二十三則・垂示」の「至二於衲僧門下一。一言一句。一機一境。一出一入。一挨一拶。要レ見二深浅一。

要レ見二向背一」のように、問答によって門下の僧をおしこめる、つまり、問答によってその力量を測る意の語として用いられ、更に、問答→言葉のやりとりと語義が変化して、②以下の意味の用法が派生したものと考えられる。

（『日本国語大辞典』第２版。各用例等は省略した）

どうやら日本語で「挨拶」が用いられるようになったのは、禅問答からしい。しかしそれも初めは「一挨一拶」という形であったようだ。『碧巌録』は中国・宋代（北宋960～1127・南宋1127～1279）の1125年に完成した仏書、臨済宗で重視されたという。臨済宗は日本には栄西が建久２（1191）年に伝えた。また、①の用例には、

＊文明本節用集（室町中）「挨拶 アイサツ」
＊禅林類聚撮要抄（1642）「挨は挨拶と云て押し詰る義也」

があげられている。すると「挨拶」ということばは12世紀末以降、15世紀後半には日本でも用いられていたことになる。

中国ではどうだったのか。葛長庚は宋の人、道教の南宗五祖の一といい、『海瓊集』などの著があるという（大漢和辞典）。その『鶴林問道篇』の用例は中国・日本の辞典でよく引かれるものだ。

挨拶　拥挤：挤进去。葛长庚《鹤林问道篇》：“昔者天子登封泰山，其时士庶挨拶，独召一县尉行轿而前。”

（《辞海》1979年版　缩印本　上海辞书出版社　1980年刊）

「挨拶」は「拥挤；挤进去」の意だという。「拥挤」は人や車などが、押し合う、押し合いへし合いする、込み合う意、「挤进去」は押し合って中に入る意である。

このことからすると、中国でも「挨拶」という語の使用例はそれほど古くないようだ。もっとも「挨」は『説文』に「擊ㄴ背也」とあって古い。宋以後に多く用いるようになるが、みな俗語、しかし「拶」は『説文』にない字で、使用例は唐からになるという(字通)。そして現代、「挨拶」は一般的に中国で用いられることはなさそうで、これに相当するのは「招呼」「寒暄」「问候」「致意」「致辞」などと言うようである(『岩波日中辞典』)。

【挨拶】込み合う．▶初期の白話に多く見られる語．
『日中』日本語の「挨拶」には“应酬话”“寒暄”“问候”“打招呼”などが相当する．

(『小学館中日辞典』発音記号等は省略した)

ちなみに『小学館日中辞典』には囲み記事「あいさつ」があり、現代中国での事例がさまざまな場合に分類して詳細に紹介してある。

以上、日本と中国の辞典に見られる「あいさつ」の事例からまとめてみると、

1、「挨拶」は中国語であった。
2、中国語の「挨拶」は「押し合う」という意味であった。
3、中国でも日本でも、「挨拶」は禅家が用い始めた。
4、日本での「挨拶」は、問答によって門下僧の力量をはかる、という意味であった。
5、中国で「挨拶」は初期の白話、俗語で広く用いられたが、現代では一般的には用いないようだ。
6、日本では中世以降、現代でも広く「挨拶」という語を用いている。
7、日本で広く用いてきている「挨拶」の語義は、ことばのやりと

り、の意に変化・派生したものだ。

としてよいだろうか。

そうだとしても、ここからは、

ア、「挨拶」以前はなんと言ったのか
イ、禅家の「挨拶」はどのように行われたのか
ウ、禅家の「挨拶」はどのようにして「ことばのやりとり」になったのか

という疑問が生じてくる。

古く中国では儒教の「礼」、日本では「礼(いや)」が「挨拶」に相当するかという（世界大百科事典)。また「ことばをかける・声をかける」「もの言い」というのが一つの用語だったともいう（柳田國男『毎日の言葉』)。それはそれとして、押し合う、問答、ことばのやりとり、といった内容の古代日本の表現事例を見る必要があるのではないか。

2、「挨拶」以前

『古事記』には、「言う」に関連した、いわば「ことば」の文はどのように表現されているか。いま、神話の冒頭部分からそのいくつかを見てみよう。

1、是(ここ)に天(あま)つ神(もろもろ)諸(みこと)の命(も)以(い)ちて、伊邪那岐(いざなきのみこと)命、伊邪那美(いざなみのみこと)命、二柱(ふたはしら)の神に、「是(こ)の多陀用弊流国(ただよへるくに)を修(をさ)め理(つく)り固(かた)め成(な)せ」と詔(の)りて、天(あめ)の沼矛(ぬほこ)を賜(たま)ひて、言依(ことよ)さし賜ひき。
2、是(ここ)に其の妹(いも)伊邪那美(いざなみのみこと)命に問(と)曰ひたまはく、「汝(な)が身は如何(いかに)か成れる。」ととひたまへば、「吾(あ)が身は、成り成りて成り合はざる処(ところ) 一処(ひとところ)あり。」と答白(こた)へたまひき。

3、爾に「汝等は誰ぞ。」と問ひ賜ひき。故、其の老夫答へ言ししく、「僕は国つ神、大山上津見神の子ぞ。僕が名は足上名椎と謂ひ、妻の名は手上名椎と謂ひ、女の名は櫛名田比売と謂ふ。」とまをしき。

4、爾に高御産巣日神、天照大御神の命以ちて、（略）思金神に思はしめて、詔りたまひしく、「此の葦原の中つ国は、我が御子の知らす国と言依さし賜へりし国なり。故、此の国に道速振る荒振る国つ神等の多在りと以為ほす。是れ何れの神を使はしてか言趣けむ。」とのりたまひき。爾に思金の神及八百万の神、議り白ししく、「天菩比神、是れ遣はすべし。」とまをしき。故、天の菩比の神を遣はしつれば、乃ち大国主の神に媚び付きて、三年に至るまで復奏さざりき。

（上巻。日本古典文学大系本による。漢字は新字体に改めた）

それぞれの構文は、「ことば」に関わっていえば、1は「命以ちて－詔りて－言依さし」、2は「問曰ひ－答白へ」、3は「問ひ－答へ言し」、4は「命以ちて－詔り－言依さし－言趣け」「議り白し」「復奏さ」となっている。1は一方的な命令で終わっているが、4に明らかなように、「言依さし」に対しては「復奏」がともなうべきものであった。コトヨス（ことばを寄せる、依頼する、命令する）・カヘリゴト（返事のことば）は、時に「あいさつ」となりうるものである。2・3はともに問答の形を取っている。2は単なる会話だとしても、3の場合は特に、誰という問いに対して素性と家族の名を答えている。出会った相手に誰かと尋ねるのは「誰何」といい、中国でもあることであった。これはまぎれもなく「あいさつ」と言いうるものである。しかし『古事記』はこういう問答をなんと呼ぶかを明示していない。それでも「ことよす」「かへりごと」「問答」というありかたに「あいさつ」の要素をみることはできた。

『万葉集』はどうか。

1、籠もよ　み籠持ち　掘串もよ　み掘串持ち　この岳に　菜摘ます児　家聞かな　告らさね　そらみつ　大和の国は　おしなべて　われこそ居れ　しきなべて　われこそ座せ　われにこそは告らめ　家をも名をも　（巻1－1）

2、額田王の近江国に下りし時作る歌、井戸王すなはち和ふる歌

（巻1－17題）

3、天皇、蒲生野に遊猟したまふ時、額田王の作る歌

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

（巻1－20）

皇太子の答へましし御歌　明日香宮に天の下しらしめしし天皇、謚して天武天皇といふ

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

（巻1－21）

4、相聞（巻2部立ほか）・古今相聞往来歌（巻11・12目録）

5、天皇、鏡王女に賜ふ御歌一首

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを　（巻2－91）

鏡王女、和へ奉る御歌一首

秋山の樹の下隠り逝く水のわれこそ益さめ御思よりは

（巻2－92）

6、……諮ひて曰はく、東隣の貧女将に火を取らんとして来たれりといへり。……　（巻2－126左注）

7、……朝ごとに御言問はさぬ……　（巻2－167）

（日本古典文学大系本による。漢字は新字体に改めた）

1は『万葉集』の巻頭歌である。雄略天皇が菜摘みの少女に求婚した歌として名高い。求婚は自分の素性を明かし、相手の家（住まい）・名

を問うという形で進められることを、この歌は示している。しかしいま視点を変えていえば、この求婚歌は天皇の少女への「あいさつ」だと言ってもよいだろう。その「あいさつ」は相手を知るための問いかけになっており、しかも歌である点が重要である。

２は題詞のみを載せて歌を省略したが、「和(こた)ふる歌」というものがあることに注目しておきたいためにあげたのである。それは３のように問いかけの歌があって答え返す歌がある、というのが本来の形である。５の場合は「賜ふ」「和(こた)へ奉(まつ)る」、つまり歌で贈答がなされたことを見せている。４の「相聞」は、雑歌・挽歌とともに『万葉集』の代表的な部立の一つである。もと中国で用いられていた語であるが、『万葉集』では男女間の恋の消息を取り交わす意を広げて、さまざまな人間関係のなかでの心を通い合わせた歌が集められている。「古今相聞往来歌」というのは後に目録に加えられた語とされているが、相聞は往来という形を取ることを示している。

これまでのところでいえば、『万葉集』にみる「あいさつ」は、歌という形式で表現されること、それも問答・贈答・唱和・消息・往来などと、微妙な違いを見せつつも、さまざまな内容・方法を表し出していることがわかる。しかしそれらを総括したことばはなかったようだ。そんななかで６・７の「諮(とぶら)ふ」「御言問ふ」は「あいさつ」という語に相当する要素を持ちえていたのかもしれない。「諮」は『万葉集』にはこの１例しかないが、ふつうハカル・トウなどと訓じるから、むしろ「訪」という漢字で意味を理解してよいものであろうし、「問う」と共通しているということもできる。「御言問ふ」は「御言＋問ふ」という語構成なのだろうが、「言問ふ」は『万葉集』に26例あり、関連語も含めればかなりの用例があるから、いわば一般語として広く用いられたといってよいだろう。『万葉集』にはほかに手紙・進物など、「あいさつ」に関係することばは多くあるが、それらはまた別の機会にみることとする。

その他、平安時代の用例までを列挙する余裕は今ないが、柳田國男の

言う「もの言い」について若干触れておきたい。柳田は「物言ひをしようといふ際には、古風な人たちは先づ是から物を言ふといふ宣言をしました。それが物申す又略してモノモウという言葉の起り」で「『物申すわれ』といふ言葉は、すでに古今集の歌の中にも見えて居ります。」と言っている。その歌は、

題しらず　　よみ人しらず
うちわたすをちかた人にもの申すわれ　そのそこにしろくさけるはなにの花ぞも　（巻19－1007旋頭哥）
返し
春されば野辺にまづさくみれどあかぬ花　まひなしにたゞなのるべきはなのななれや　（同、1008）
（日本古典文学大系本による。漢字は新字体に改めた）

とあるものである。男が花の名を尋ねている、つまり女に求婚しているのに対し、贈り物なしには教えてやれない、と女の侍女が断っている趣向の歌である。「もの申す」は現代語の「ちょっと伺いますが」に相当する、いわば「あいさつ」のことばである。「なのる」が求婚を意味しているのは、『万葉集』の例１以来の伝統表現であり、男は単に花の名を知りたかったのではない。「もの申す」は確かに「あいさつ」のことばの一つではあるが、柳田が言うようにこれからきた民俗語彙の「もの言い」が、「挨拶」になる前の一般的な言い方だったかどうかは、なお考えてみる必要があるのではないか。むしろ『万葉集』に見られた「言問ふ」の名詞形コトトイがそれではなかったかと、今のところ想定している。

３、「挨拶」以後

禅家の「挨拶」の詳細はまだ調べが行き届いていない。それでも次の

ような事例のあることを知った。

〔仏光円満常照国師語録七法語〕示二大宰少弐一 ○中略
承レ問、公案如何提撕、公案乃是諸仏諸祖運用法身、如三風行二水上一、
如三電激二長空一、一挨一拶、自然成レ文、（下略）

（『古事類苑』宗教部一による。漢字は新字体に改めた）

公案（参禅者に示す課題）は一挨一拶すれば自然に文を成す、ということか。そうだとして、「挨拶」ということばの用いられ方はわかるが、「挨拶」がどのような行為、行儀なのかがわからない。かつてチベット仏教を取り上げたテレビ番組を視ていたときに、若い修行僧が年長の僧に手足を振りかざしながら挑むように質問していた場面があったが、あのようなあり方が「挨拶」なのだろうか。さらにその「挨拶」がどのようにして「ことばのやりとり」に変容して「あいさつ」となったかも、不分明のままだ。

ともあれ、冒頭に引用したように、「あいさつ」は実に多岐にわたる意味変化をしてきている。その中で特異なのは、

発句または連句において、主人または客が、相手に対する儀礼、親愛の気持をこめて句を詠むこと。

である。たとえば、芭蕉『冬の日』の冒頭、

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　　芭蕉
　　たそやとばしるかさの山茶花　　野水

について、中村俊定は野水の句の後に、

山茶花のちりかかる風流な笠を着て居らるるは、どなたでしょうかの意。芭蕉の挨拶の発句に対する答礼の脇で、客の風雅をほめる意をもって仕立てた句。（下略）

と言い、頭注に、

其時は野水亭へ始て入来也。亭主の挨拶崇敬仕て云（いう）句也。笠の山茶花は宗祇髭に香焼（たき）、牡丹（肖柏）牛角に箔置く躰の風流也

（日本古典文学大系本による。漢字は新字体に改めた）

という越人注を載せている。芭蕉の発句は挨拶の句と、連句の世界ではふつうに言っていたのである。つまり、ここでいう「挨拶」は、日常生活でいう「あいさつ」とは異なって、文芸様式の上での一つの用語となっているわけである。「あいさつ」が文芸化したといってもよいだろう。

かつて山本健吉は、俳句の本質を滑稽と挨拶という二つの概念で繰り返し論じたことがある。たとえば、

私が俳句形式のなかに、唱和的・対詠的性格を認めたのは、以上のような本質的考察に基づくものであった。それを私は、挨拶という言葉で言い現わそうとしたのである。

……私は滑稽によって俳句の本質を狭くしぼり、挨拶によって俳句に社会的な広い場所を導入する。私が、最近俳句について書くものは、すべてこの一点をめぐっての主張である。……

（『俳句』昭和28年７月号）

（『山本健吉俳句読本』第１巻「俳句とは何か」
角川書店　平成５年刊による）

のごとくである。山本は俳句形式に唱和・対詠的性格を認め、それを「挨拶」と言っている。「挨拶」の原義を踏まえ、日本の古来の「あいさつ」のあり方を見据えての論といってよいだろう。

おわりに

ここに大急ぎで「あいさつ」ということばの発生状況をみてきた。「挨拶」は禅家が用い始めたことばであり、それは問答をともなうものであった。そして「挨拶」ということばが用いられる以前の「あいさつ」を総括することばは、「言問い」といった可能性があるとしてみた。これも問答形式を基本とするものであった。この形式は以後の「あいさつ」にも受け継がれてきている。和歌に始まったこの形式は俳諧にいたって、文芸における一つの表現様式として定着した。つまり「あいさつ」は問答を基本とするものである、ということをここに確認しえたと思う。

しかしその「あいさつ」が単なる「ことばのやりとり」へと変わっていく様相をみることが残ってしまった。別に取り組んでみたい。